

(第3種郵便物認可)

毎日新聞 (夕刊) 2002.12.17

文化 批

近代批判と共生の復活

イリイチ思想の先見性と限界

田中 智志

宮嶋野井 雨高永川岡 瀬木居飯田 広正鳥藤一

イバン・イリイチ氏は、『脱学校の社会』『脱病院化社会』『シャドウ・ワーク』などの著作をつづじて、1980年代以降、日本の思想界に大きな影響を与えてきた。とりわけ80年代後半、学校に強い違和感を抱いていた若い教育学研究者たちは、彼が考案した「学校化」という概念に小おどろし、熱狂的にイリイチ氏を支持した。そのころ、大学院生だった私もまさに「学校化」の中心にいた。



イバン・イリイチ氏

イリイチ氏は、学校で教育される過程と学びを混同することとを論じている。たがえば、教授されることは学習すること、資格を取得することとは能力を形成すること、と思いつくことである。それは「医療化」「セックス化」など、近代化とともに広まった「価値の制度化」、つまり生きものの見えか

イリイチ氏は自律的・協動的な学びを実現するために、利用者さまさまな知識を提供し利用しあう「学習ネットワーク」を提案している。たしかにそこには、「教えてあげらんだから、ちゃんと勉強しなさい」という押しつけがましいものがある。イリイチ氏が論じたとおりに、共生は大事な理念である。イリイチ氏は3日死去、76歳に難しいと思う。

イリイチ氏は自律的・協動的な学びを実現するために、利用者さまさまな知識を提供し利用しあう「学習ネットワーク」を提案している。たしかにそこには、「教えてあげらんだから、ちゃんと勉強しなさい」という押しつけがましいものがある。イリイチ氏が論じたとおりに、共生は大事な理念である。イリイチ氏は3日死去、76歳に難しいと思う。

である。成果といえは、川野里子の小さな器にとまりながら、は排句は、より小さな場所、たい。(専門編集委員)

ダブルクリック

いまタイに来ている。日中の気温は三十三度。初雪の東京とは別世界の観がある。かつて拙著『アジア 新しい物語』に登場していたいた方々のその後を訪ねるべく、今回はバンコクにやって来たのだ。ここには、タイ屈指の外食チェーン「ダイヤモンド」を経営する福田千城さんという日本人がいる。五年近く前にお会いしたとき、タイはアジア経済危機の真っ只中で、福田さんも悪戦苦闘していた。しかも私の帰国後、状況はさらに悪化し、最盛期には八十三店舗あったバーベキュー・チェーンが、六十軒前後にまで続々と閉店

アジア再訪の旅

に追い込まれてしまった。それなのに、タイの従業員たちには危機感が深刻な表情も見られないのだ。「最初はそれが歯がゆかったんですけどね」と、福田さんは九州弁の残る口調で振り返る。「みんな、何とかなるやろ」といった感じで。それで実際に何とかなって行くのが、タイの社会なんです。(笑)福田さんは昨年、「ヤキシャブ」というバーベキューとタイスキ(タイ風しゃぶしゃぶ)をミックスさせた新メニューを開発し、これが起死回生のヒットとなって、店の数も最盛期を上回る八十六軒に伸

野村 進 (ノンフィクションライター)

ばしている。彼を蘇らせたのは、タイで身につけた柔軟な思考法ではあるまいか。私は、かねてから「日本先生、東南アジア生徒」という進出企業の図式に反感を感じてきた。もうとくに学び合う時期に入っているのではないか。タイは、経済至上主義が飽和点に達したあとの社会のありようを学べる。日本は、必要以上にあすを思い煩わない楽観性や、日常に根づいた仏教に生きる人々の謙虚さを学べるだろう。ちなみに、この取材の模様は、新年の一月十二日、NHK・BS1「アジア情報交差点」で放映される。

イヴァン・イリイチ氏を悼む

こがら ちろお
粉川 哲夫

三日に亡くなった思想家、イヴァン・イリイチの生涯は、波乱に満ちていた。ウィーンに生まれ、ナチスの迫害を逃れ、イタリヤに渡った少年イヴァンは、レジスタンスに加わり、ナチの略奪をかわすために家畜を森に隠す仕事をしていたといふ。やがて神父になった彼は、一九五一年にニューヨークの「スラム」に派遣される。そこで見たのは「アメリカ」ではなく「第三世界」だった。このときの

経験が彼を最終的にメキシコに導いた。が、その間、パチカンの教皇庁とはたびたび対立し、六九年には聖職者の地位を離れた。八六年、東京下北沢にあったMFM局でイリイチは、



イヴァン・イリイチ氏 (A.P.)

長時間そんな話を聞かせてくれた。イリイチが日本で一般に知られるようになるのは、

いうイメージがイリイチに定着していた。実際、彼は精神的にそうした分野の市民活動家に会い、実りある対話を積み重ねていった。しかし、ラジオ局で間近に

た。その本にはたしかにそういふことが書かれていたが、インターネットがまだない時代には、イリイチの先見性は見過ごされていた。それですべての謎がとけ

ながらないのが疑問だった。コンヴィヴィアリティとは、複数の個が寄り集まり、創造的なことをしている状態である。近代のテクノロジーは、人を孤立させ、他者と親密な関係を結ぶことを邪魔するが、テクノロジーには、そうでない使い方があつた。そのように使うときのテクノロジーを「コンヴィヴィアリティのための道具」と呼ぶというわけである。それは、まさにわたしたちがMFMでやろうとしていたことだったし、「反テクノロジー」とは

近代のテクノロジーを否定したが、とりわけ電子テクノロジーのなかに近代を「見える可能性を見つけた」。イリイチは、専門を問われると「西欧中世史の歴史学者」であると答えていたが、彼は、中世の「暗黒」の向こう側に近代を「見える可能性を見つけた」。『脱近代』(ポストモダン)のはずだった二十一世紀がいよいよ「暗黒時代」の様相を呈しはじめたいま、イリイチの再読は一つの突破口をあたえてくれるにちがいない。(東京経済大学教授・メデア論)

「脱近代」のテクノロジー模索

一九七七年に『脱学校の社会』が翻訳されてからであるが、五度目の来日であったこのときは「反テクノロジーとエコロジーの思想家」と

話をしたイリイチは、そうしたイメージとは若干違っていた。彼は、『脱学校の社会』に関しても、学校に象徴される現代の無用な諸組織をえぐる代案として提出した「学習のウェブ」の重要性を強調し

た。わたしは、イリイチの「コンヴィヴィアリティのための道具」(七三年)が、アメリカでは、電子掲示板の創始者たちに強い影響をあたらせたことを聞き知っていたが、日本で定着したイリイチ像とはつ

ことなる方向だった。彼は、

読者新聞

2002年12月11日 (水)

Yomiuri

(11. Dec. 2002)